青苗遺跡発掘調査事業報告書

——道々奥尻線青苗市街～奥尻空港間道路整備事業
に係わる緊急発掘調査——

（昭和51年度分）

奥尻町

奥尻町教育委員会

目　　次

はしがき …… 1

調査団の構成員 …… 1

1. 青苗遺跡の地形環境 …… 2

2. 青苗遺跡の地質・土壌環境 …… 2

3. 調査の方法 …… 4

4. 遺物および遺構の出土状況 …… 4

5. 出土遺物と遺構 …… 5

6. 発掘調査、整理作業の現状 …… 7

付記 …… 7

はしがき

青苗遺跡の発掘調査は道々奥尻線青苗市街～奥尻空港間の道路整備事業に係わる緊急発掘調査である。本調査は函館土木現業所が奥尻町と委託契約を締結し、昭和51年4月5日より昭和52年3月31日に亘って行なった。本報文はその結果報告書であるが、事業が昭和52年～53年に継続されているので内容は中間的なものである。また出土遺物が斯界の常識を超える甚大な物量であったことからくる整理作業の遅れもあり、調査の学術的内容に対しては深く触れることができない。したがって、これまでに明らかになった遺跡の性格、文化遺物、自然遺物の種類、数量、人為的遺構、それらの凡その編年的位置の概略、および発掘と整理作業の進行の状況について述べることにする。

調査団の構成員

発掘調査責任者		越森幸夫	奥尻町長
発掘調査担当者		佐藤忠雄	日本考古学協会員
調査員	(考古学)	佐藤芳子	北海道大学
〃	(土壌学)	山田　忍	専修大学教授
〃	(文化人類学)	河野本道	駒沢大学講師
〃	(動植物分類学)	金子浩昌	早稲田大学講師
〃	(測量)	三好文夫	旭川大学講師
〃	(C^{14}測定)	木越邦彦	学習院大学教授
〃	(遺物保存学)	森　光晴	古照資料館主査
〃	(考古学)	其田良雄	旭川市立博物館
事務局		山下育三	奥尻町教育委員会社会教育係長
〃		泉沢克尚	青苗遺跡専任事務員

1　青苗遺跡の地形環境

遺跡は奥尻郡奥尻町字青苗319、320、345、434番地、字米岡6、11、13、33の1、34の1　番地に所在する。該地は奥尻島の南端に発達する海岸段丘上に位置する。この海岸段丘は一般に千畳ヶ丘と呼ばれているが、比高によって次のように区分される。

1)	青苗川段丘	比高	360～400 m
2)	フケ歌沢段丘Ⅱ	比高	240～260 m
3)	松江段丘Ⅰ	比高	260 m
	松江段丘Ⅱ	比高	180 m
4)	赤石段丘	比高	100～160 m
5)	米岡段丘	比高	80～100 m
6)	寺屋敷段丘	比高	50～ 60 m
7)	青苗岬段丘	比高	4 m以上

青苗遺跡というのは青苗市街から米岡に通ずる道路に沿った耕地と青苗岬段丘と寺屋敷段丘の境いにあたる急峻な傾斜地附近一帯に連続あるいは不連続的に分布する遺跡群の総称である。このたびは遺跡群のなかの青苗墓所前地点、町道分岐地点、青苗貝塚地点の一部、懸崖地点の4箇所が発掘調査の対象となった。

2　青苗遺跡の地質土壌環境

遺跡が存在する寺屋敷段丘は海岸に向って緩やかな地傾斜を示し、青苗岬段丘との遷急点は急峻な崖状となっている。寺屋敷段丘の基盤は頁岩層であり、その上部を段丘堆積物が数mの厚さで覆っている。

堆積物は粘土層で恐らく火山噴出物が母材となっているものと思われるが、風化を受けて腐植を多量に含むローム化した土壌となつている。墓所前地点では降雨のさい遺跡の上方より流出して堆積したと考えられる。このローム層を母材とした再堆積層が被覆しているところがある。

標準的には再堆積層の上部に6種類の火山灰が降下堆積しており、これらは古い順から下表のように識別される。

層名	層厚	生成年代	測定方法	噴出源	包蔵遺物の種類
古期ローム層	30cm以上	——	——	不明	円筒土器文化期住居址
再堆積 A/B 層	25cm / 30cm	3,700 +800 −700 B.P.	黒曜石水和層	不明	円筒土器下層式〜上層式
Os白ハンA層	10cm	——	——	渡島大島	なし
Koe A/C 層	12cm	1,700±180 B.P.	C^{14}	駒ケ岳	なし
Osb A層	5cm	——	——	渡島大島	擦文土器
O tobe A/C 層	11cm	337年前	(奥尻島探討記)	奥尻島神威岳	なし
O sa A/C 層	17cm	263年前	(北海道史年表記録)	渡島大島	なし

発掘区が設定された4箇所の土層構成は当然のことながら自然、人為などの影響をうけており、それぞれ異なった堆積様相を呈しているので、この標準土層の調査結果をもとにして比肩、同定することにした。

青苗墓所前地点、ここの場合はOsa層、Otobe層、Osb層、Koe層、Os白ハン層に遺物の包含はなく、再堆積A層、再堆積C層より出土し、とくに再堆積C層に密集している。この層は鈍い黄橙色で山中式による土壌硬度は35と極めて硬い。乾燥時にあっては移植ゴテで4cm、スコップをもってしても10cmと堀り込めない。しかも遺物が30〜50cmの厚さに敷き詰められた状態で重なりあっているのであるから作業の進度は大巾に遅延した。遺構は古期ローム層に構築されている。町道分岐点も殆んど同じ状態である。

青苗貝塚地点、この地点は擦文文化期唯一の貝塚が所在するところであり、本道古代史解明の上に極めて重要な遺跡として保存対策が強く望まれていたところである。結果として道路側一部が避られず発掘区の設定となった。しかし、そこは過去3回に亘って小規模ながら発掘調査が実施されたところであり、土層の正常な堆積は失われていると判断したからである。

ここの本来的層序は台地上平担部にあって標準土層と同一である。貝層がみられるのは斜面であってO saA層、O saC層、O tobeA—C層を欠いている。

これは過去における調査と盗掘による攪乱、自然の流亡によるものである。貝層はＯsbＡ層とＫoe層との間に薄く狭在する。懸崖地点も標準土層とほぼ同じであるが、部分的に耕作が深く及ぶところがあり欠脱層もある。

3　調　査　の　方　法

各発掘区とも磁北をＸ軸とし、これに直角に交叉するものをＹ軸とし、各軸を４ｍ間隔に区切って正方形のグリッドを設けた。この場合のグリッドの名称はＸ８－Ｙ10のようになる。（墓地前）また発掘区の西隅に基点をおき西より東に向ってＡ．Ｂ．Ｃ……、北より南に向って１．２．３……の記号を与えてた。この場合のグリッドの名称いＡ－１のようになる。（貝塚地点）

また、精査を必要とした場合は４ｍ×４ｍを２ｍ×２ｍあるいは１ｍ×１ｍのグリッドに細分し、時計廻りにａ．ｂ．ｃ．ｄの記号を付した。セクションベルトは例外を除いて原則的にグリッドの南と西側に１ｍの巾で残し、必要に応じて取りはずすことにした。

鉛直的には前もって遺物の表面採集を行ない、状況に応じ表土の除去にブルトーザを投入したが、最終的に墓所前地点の約600㎡ほどに止まった。

4　遺物および遺構の出土状況

本遺跡の遺物の出土は耕作による攪乱－墓所前では再堆積層が地表に露呈している箇所があり、遺物が周辺のＯs白ハン層に可なり移動した形跡が見られる－されたところを除き再堆積層、古期ローム層（墓所前）、Ｏsb層、古期ローム層（貝塚地点、懸崖地点、町道分岐点）の３層に限られている。つぎに簡単に各層における遺物、遺構の出土状況に触れる。

古期ローム層、本層からは円筒土器下層式、上層式文化期に属する４基の竪穴住居址、ピット１基などが遺物を伴って検出された。竪穴を埋めている土層は再堆積層で第２～４号竪穴の場合がそれであるが、多数のチャート、円礫を含み、石器ではとくに石冠、半月状偏平打製石器が極めて多かった。土器は竪穴内にあっては円筒土器下層式あるいは上層式土器が安定した形で

認められたが、竪穴上面に発見された薄い焼土層より上部のものは円筒土器下層式と上層式が混然となって出土した。しかし個体そのものの破損時の状態としては比較的まとまつており再堆積層の生成過程が問題になってくる。竪穴住居址が発見された付近は道路整備の中心線 440 m 地点より南方への地傾斜の部分にあたっており、遺物の出土量が多く付近 200 m² の小面積から約 6 トンに及ぶ石片、石器、土器の出土を見た。

第 1 号竪穴の場合は例外で上部をＯＳ白ハン層が覆っている。なお本竪穴はＩＰ№ 5 より北の 15 m 地点付近にあり、拡張区を設定して検出されたものである。

これによって遺構が現道下に残されていることが確認され、昭和52年度の発掘調査に継続される原因の一つになった。

Ｏsb層、本層からは擦文文化期に属する深鉢形、高坏形の擦文土器とそれに共伴して海獣骨、鳥骨、魚骨、貝類少量の骨角器が出土している。また鉄滓と広い焼土と小さい堤状の壁をもったタタラに酷似した遺構と古期ローム層を長方形、円形に掘ってしつらえた木枠の囲いをもつ湧水溜が 1 基検出された。うち 1 基の中央には完形の高坏形土器が伏せた形で出土し注目された。擦文文化形の湧水溜あるいは井戸といつてもよいのも知らないものの発見は本道で初めてである。

5　出土遺物と遺構

発掘によって出土した遺物の総量は 60×37×11 cm の整理箱 1,100 箱である。この量は驚威に価いするもので実質 7 ヶ月にみたない発掘期間では本道のみならず全国的にも類をみないだろう。面積比においてしかりである。因みに運送に 11 トンの大型冷凍車を必要とし、石冠約 3.000 個とすり石、台石など重量のあるものを積み残した。遺物の実数については未だ分類途上であり掌握することができないので、種類を列記する。

土器　1.　縄文文化前期末葉に属するもので円筒土器下層式の d_1、d_2 に分類されるもの。

2. 縄文文化中期に属するもので円筒土器上層式のａ．ｂ．ｃ．ｄと呼に分類されるもの。

3. 縄文文化後期初葉に属する十腰内Ⅴ式土器、あるいは中期末葉の見晴町式土器に分類されるもの。

量的には円筒土器下層式、上層式が圧倒的に多く、しかも復元可能なものが150個体以上はあるものと見られる。発掘区別では墓所前地点が約95パーセントを占める。

4. 擦文文化期に属するものである。

町道分岐点と貝塚台地上より出土し、墓所前地点からの出土皆無である。形態は深鉢形、高坏形である。現在まで復元されたもの深鉢形12個体、高坏形18個体である。

石器ノ墓地前地点が95パーセントを占める。種類は下記のとおりである。

○石　　鏃　　有柄、無柄があるが黒曜石製は数点で他は全べてチャート製である。

○尖頭状石器　　石質は硅質硅岩

○石　　槍　　有柄で20cm近い大型のものもある。量は少ない。

○石　　匙　　縦形のものが殆んどで横形は少ない。

○石　　核　　頭大のものから拳大まで多様である。

○石　　斧　　数は10余点で少ない。

○石　　冠　　破損したものを加えるなら 3.000 点になるだろう。

○偏平打製石器　　石冠同様に出土量が多く、 1,500 点は下らないだろう。

○剝片石器　　膨大であり数は把めないが５ケタのオーダになるだろう。

以上のほか垂飾器、玉類、円形土製品などがある。

○骨　角　器　　貝塚の攪乱層より銛先Ⅰ、Ⅱ刺突器しが出土している。骨角器とみなされないが鋭利な刃物による切痕のあるものは相当量ある。これからの全資料は早稲田大学で目下分類精査中である。

○鉄器ならびに鉄滓　　鉄器は棒状の細いもので中空になっている。鉄滓は貝

塚の台地上と町道分岐点の2ヶ所で広い焼土に接して出土した。貝塚の場合は遺構を伴い、町道分岐点では井戸に近接している。恐らく製鍊が行われたものと推測される。

○遺　　構　墓所前地点で4基の竪穴住居が発見された。竪穴は互いに切り合った状態にあり、完全なものは2基である。またピットが1基検出された深さは1 m 20 cmある。

6　発掘調査、整理作業の現状

昭和51年度当初に提出した青苗遺跡発掘調査日程表はつぎのような変更があった。

○　懸崖地点　貝塚地点に合わせて約30日間の遅れを出している。理由は墓所前地点にあっての再堆積層の掘開難と出土遺物の増大によるものである。

○　整理作業のなかでは出土遺物の増量によって土器の復元、実測、拓影、石器の実測に遅れがでている。なお町道分岐点、貝塚地点の復旧、拓影、実測は完了している。今後どの時点で作業を打ち切るか問題になるが、現在不可欠な遺物個々に対するデータの記載、台帳登録が終了に近いので詳細に検討を加えた報告書刊行までの遅れは、発掘での遅れと同様30日程度の延長を見込めば最低限の整理事項は処理できると思う。

付　記　参考まで遺物の註記に要する時間は1日延べ20人で70日、土器の洗浄で30日を費した。推量していただきたい。

発担担当者　佐　藤　忠　雄

1. 標準土層断面（貝塚地点台地上Ｆ－７区東側）

2. 墓所前地点第２号竪穴付近の状況

3. 再堆積層における遺物の包含状態（断面）

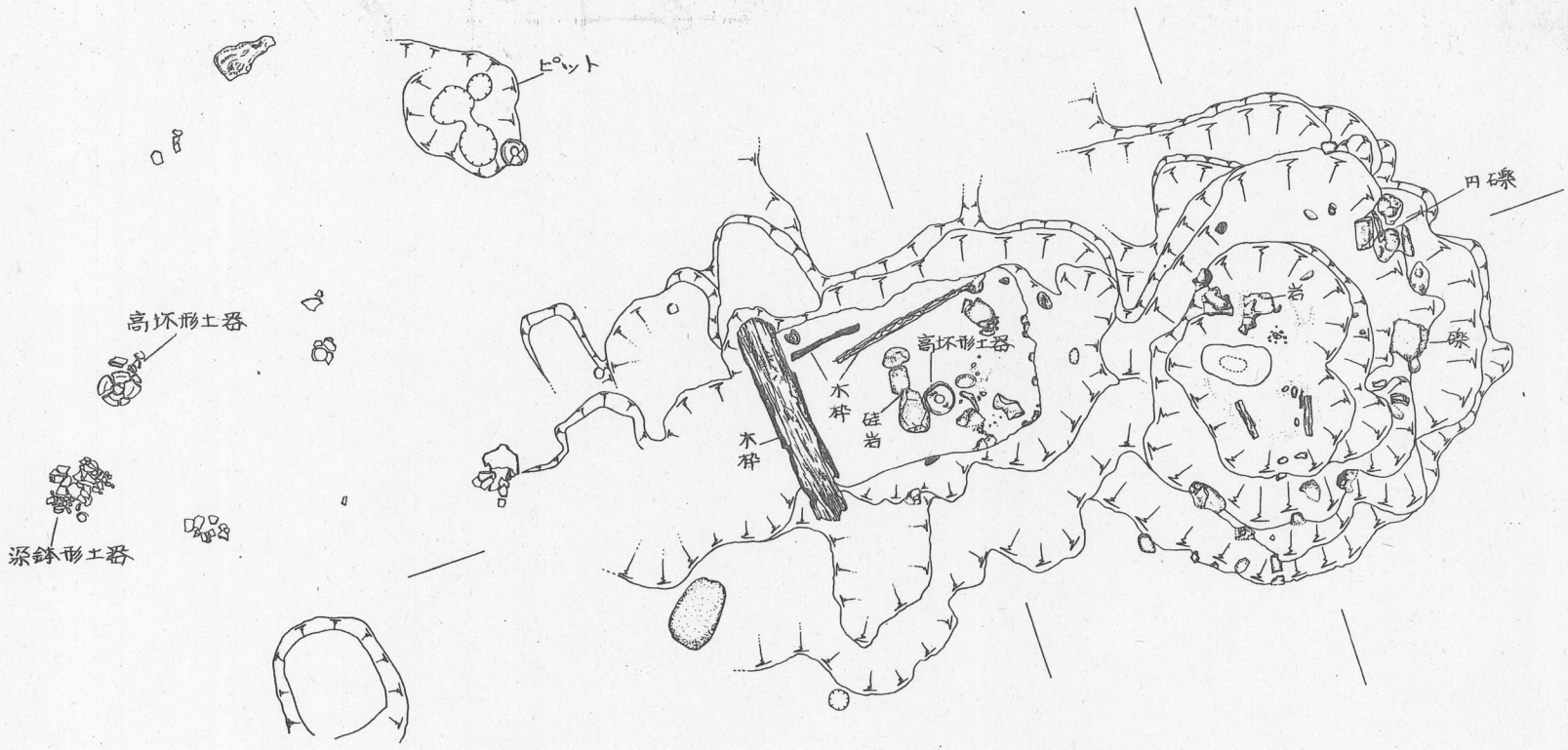
4. 再堆積層における遺物の出土状態（平面）

5.　現道路側の土層断面（遺物の包含が見られ、遺構の存在が認められる）

6.　墓地前地点発掘完了後の全景

7.　発掘前の町道分岐点（右側発掘中）と道路左側先端が貝塚地点の全景

8.　貝塚地点台上部のＧ－７～Ｇ－８地点Osb層に検出された製錬跡遺構の全景

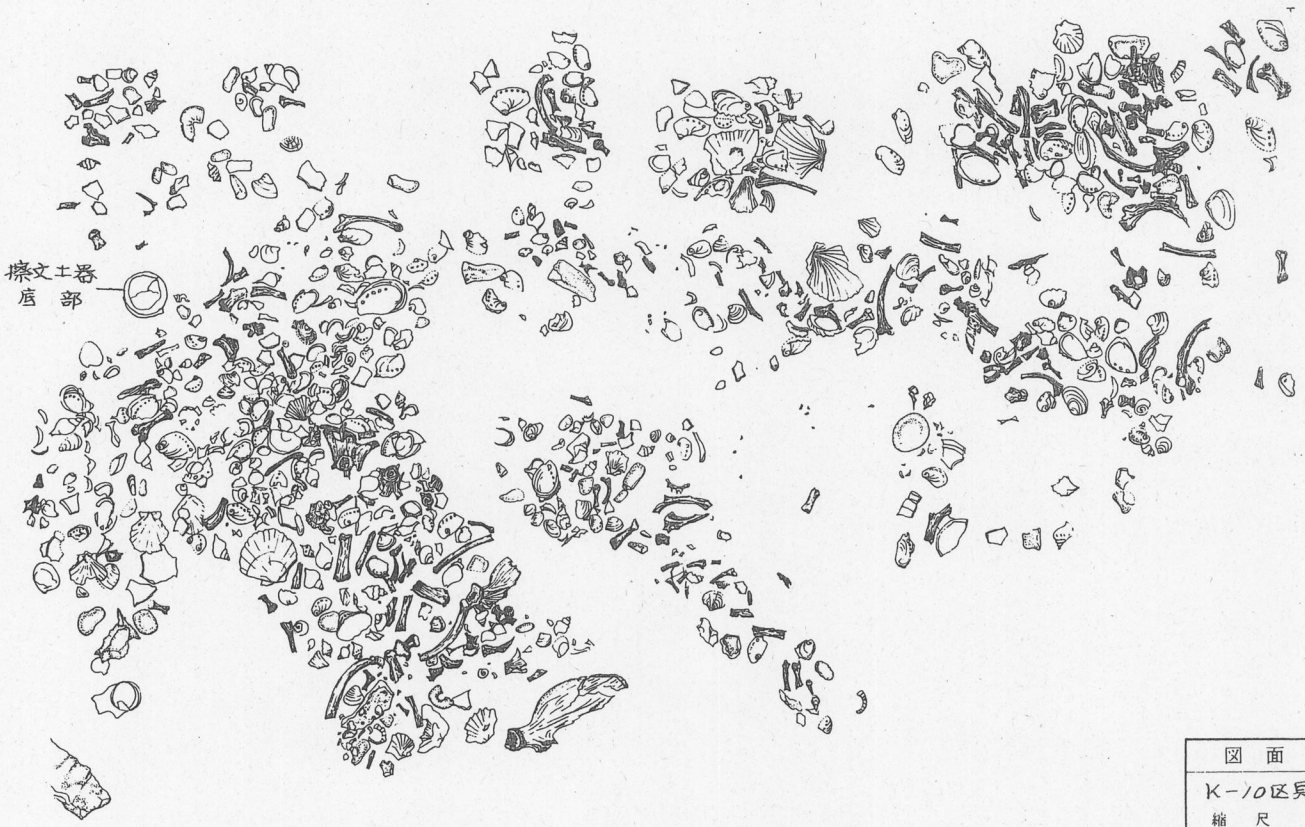


図面の名称		図面番号
可道分岐点湧水溜平面図 縮尺 1/10		10
測量	昭和51年11月11日終了	
	三好文夫	
設計		
製図 原図	佐藤忠雄	
製図 複写	岡本あけみ	

右の円形に近いものは後世のものかも知れない。水源は墓所前地点頁岩層から。

図面の名称		図面番号
貝塚地点台地上部製線跡 縮尺 平面図 1/10		11
測量	昭和51年11月13日終了	
	三好文夫	
設計		
製図 原図	佐藤忠雄	
製図 複写	岡本あけみ	

土器細片の分布状況．点鎖線は堤状の焼土質の拡がり．



図面の名称		図面番号
K−10区貝層平面図 縮尺 1/20		12
測量	昭和51年11月20日終了	
	三好文夫	
設計		
製図 原図	佐藤忠雄	
製図 複写	岡本・あけみ	
貝層の堆積が不自然である。		
海獣骨、貝類の分布		